

紅雨ノ鬼^{あめ}

1

舞台を取り囲むように、椅子が並び、人々が座っている。
舞台中央のスクエアに、一人立ち尽くす、オニの姿。

人 だれかが言った。
人 お前は何にでもなれるのだと。
人 無限の可能性があるのだと。
人 だれもが望む、素晴らしい夢。
人 それに向かって努力をしよう。
人 きつと素晴らしい人生が待っているのだから。

オニはかすかに空を見上げる。

オニ 子供の頃、自分には夢があった。この町には、空がない。真っ白い壁に囲まれた、閉じ込められた町の上には、いつもどんよりとした雲がかかっている。この町には、空がない。いつか俺は、空を見たいと思っていた。

刺殺音――

刑事 その日、一人の女が死んだ。

裁判所。

オニを取り囲むように、無数の人たちの姿がある。
その輪から離れ、一人、オニを見つめている刑事の姿――。

人 あなたは、この町の住人である、一人の女性を殺害。その場で逮捕されました。
人 そしてそれまでに起こった、七件の殺人事件についても関与を疑われています。
人 まず初めに聞きます。あなたは、
全員 オニですか？

この町には、オニと呼ばれる者たちがいる。彼らがどこから来たのか、なぜ生まれ
たのか、知る者はいない。

人 診断結果は、身分証に記載されているはずですよ。
人 答えてください。あなたは、オニですか？

彼らには心がない。人の言う、感情と呼ばれる何ものも持つてはいない。人々は理
解できない彼らを恐れ、隔離した。

人 人を殺したオニの処罰は知っていますね。

オニ ……。

人 あなたは、あなたの犯した罪を、正直に語るべきですよ。
人 例えこの先、あなたの辿る運命が変わらなくても…
人 少なくとも、最後の時、人らしくいることができるでしょう。

間

人

あなたの賢明な判断に期待します。

重たい牢の扉が閉まる音が響く。

刑務官室。

刑事がオニとの面会を求め、牢獄を訪れている。

刑事

彼と話をさせてくれませんか。

刑務官

何のために。

刑事

理解したいんです。なぜ、彼があ的女性を殺さなければならなかったのか。

刑務官

人はオニを理解できません。

刑事

分かっています。

刑事は、少し言葉を切って、

刑事

…それでも、努力は必要だと思っています。

一時、刑務官は刑事を見つめる。

刑務官

…私にそれを止める権利はありません。ですが…さしたる時間はありませんよ。

刑事

はい。

刑務官は、静かに立ち去る。

牢獄。

一人座り込んでいるオニの前に、刑事がやってくる。

刑事

久しぶりですね。

オニ

…。

刑事

いかがですか。

オニ

…。

刑事

あれつきり、何も話さないそうぞ。

オニ

…。

刑事

いえ、別にそれはあなたの自由ですが…。もし、あなたが犯人じゃないなら、それはちよつと困ったことになるんです。

オニ

…。

刑事

人を八人も殺すバケモノを、放置することになりますから。

オニ

…。

風の音――

刑事

風が出てきましたね。

オニ

…。

刑事

今夜は吹雪きそうです。

刑事は、カバンから何かを取り出すと、オニに差し出す。

刑事

…これを。

オニは、それを見ると、わずかに反応を見せる。

刑事 最後の殺害に残されていたものです。生前、被害者が大切にしていたとの証言があります。

オニ

……。
たぶん、あなたに必要なんじゃないかと思って、持ってきました。

刑事

オニは、それを受け取ると、しばらくじつと見て、

オニ

知ってるか？

刑事

なにを。

オニ

オニは、人を喰うと人間になれるらしい。

刑事

それが彼女を殺した理由ですか？

間

刑事

話してください。

オニ

……。

刑事

私は知りたいんです。

間

オニ

あの日は、ひどい雨だった。オレは何をするでもなく、ただ歩いていて、冷たい雨が身体を流れ、頭の前からつま先へ、全身を洗うのを感じていた。

女、スクエアに出てくる。

オニ

そこに、あいつがいた。同じように、ずぶ濡れで、まるで空き箱に捨てられた獣のように、その心の内に、小さな命を抱えて……。そして言ったんだ。

女

人を一人、殺してくれる？

2

市街地

町の人たちが楽しみに話しているところに、女とオニがやってくる。

女

いい？あなたがオニだっことは、絶対に知られちゃダメよ。

オニ

どうしろって？

女

オニと人の違いはなに。

オニ

オニには心がない。

女

その通り。だから、人と話すときは、できるだけ表情豊かにすること。いいわね。

はーい、皆さん、こんにちはー！

Bは女の姿を認めると、うれしそうに駆け寄ってくる。

オニの姿を見つけ、訝しげに見るB。

一方で、人々は噂話の真っ最中である。

A

ねえ、知ってる？

C 女 D C

なにあれ？
だれ？
気にしないで。ちょっと変わってるの。
ちよつとつていうか…。

オニ

ガー！

オニ、何かしようと焦って、ヘンなことになる。
人々、シラケる。

D C D C A

それに実は…
うっそ！
なにそれ！マジで！？
ひどい！
あり得ない！

人々、今度は怒る。

人々

ね？

オニ、泣くフリをする。

D C D C A

今度は泣き出す人々。

そういえばさ、
うっそ…
なにそれ。ひどい！
大丈夫？
あり得ない…。

女
オニ
女
オニ
女

…なにやってんの。
え？
笑うの。
え？
わ、ら、う、の！

オニ、引きつった笑い顔を見せる。
それを見て、満足げに笑う人々。

人々

ね？

すぐに笑顔を見せる女とB。
オニはどうしていいか分からず、戸惑っている。

人々、大笑いしたかと思うと、同意を求めるように一斉に女たちの方を見る。

D C D C

うそ！
マジで！？
ヤダー！
うける！

そこに、警備隊がやってくる。

よし、そこまでだ。

隊長
副長
町の人たち
(オニに) そのお前、そのまま動くんじゃないぞ。
ご苦労さまでーす！

オニ、へんなことになったままで、

オニ
…だれ？

女
警備隊よ。オニを捕まえる人たち。

オニ
え！？

女
逆らわないで。

女、そのまま動くな、とジェスチャーで伝え、離れる。

オニ
…いつまで！？

警備隊、へんなことになってるオニを取り囲む。

隊長
こいつは何だ。

下っぱ
分かりません！

副長
下っぱ
(殴る) バカヤロウ！ 分からないですむか！ 調べろ！
はい！

下っぱ、オニをぐるぐると眺めつつ、調べ始める。

隊長
町の人たち
居住区からオニが一人、許可なく抜け出したとの報告があった。

え！？

女、警備隊の言葉に緊張する。

B
……？

Bはその様子に気づき、女を見る。

一方で警備隊は何も気づかず、話している。

隊長
人かオニかは、見た目では分からん。どこに潜んでいるとも限らんから、十分注意

するように。

副長
分かったか！

下っぱ
分かりませんでした！

副長
下っぱ
(殴る) バカヤロウ！ キサマ、何年この仕事をやってんだ！
すいません！

隊長は、怒る副長をなだめて、

隊長
まあ待て。心配せずとも、俺にはもう分かっている。

副長
隊長。

隊長
下っぱ
(オニに) こいつの目はごまかせても、俺の目はごまかされんぞ。
隊長！

隊長　こいつは…バカだ。
全員　バカ!?
隊長　そうだ、バカだ！この間の抜けた顔をよく見てみる。バカの特徴をすべて兼ね備えている。

全員　あー…（納得）
隊長　お前もこうならないように気をつけることだ。

下っぱ　はい、隊長！

副隊長　報告！

下っぱ　はっ！

副隊長　市街地にて、バカ一名を発見。伝染の可能性があるため、近隣住民は十分に注意されたし。以上！

下っぱ

隊長　それでは、皆さん。今日も一日安全にお過ごしください。

副隊長　行くぞ！

警備隊、去っていく。

女　…もういいわよ。

ようやく自由になり、ヘタリ込むオニ。

相変わらずだわ、あの人たち。

でもオニがこつちに來たつて。

怖いよねえ…。

ねえ、大丈夫？

え？

家、そつちの方だつたでしょ？

うん、平気。

そう？

気をつけてね。あいつら、何するかわからないんだから。

まあ…たしかにね。

…。

オニ　B、オニを見ながら、急に女をからかうような口調で、

女 B　で？

女 B　で…つて？

女 B　だから…で？

女 B　え？

人々はBの言いたいことに気づいて、興味津々といった様子で、女を取り囲む。

A　だれ？

C　だれ？

D　だれなの？

女　いや、ちよつとした知り合いというか…。

焦る女だつたが、オニの方は無関心に話を聞いている。その様子に、違和感を感じるB。

人々 ふーん…。
女 え、なに？なに考えてんの？
人々 別に。
女 本当にただの知り合いだからね？
D ま、そういうことにしときましよう。
オ二 なんの話？
女 お願いだから黙ってて。

A 人々は、それ以上の追求は諦めて、
さて、と。オ二に喰われる前に帰るかなーつと。
C ねえ、いつものところ、寄ってく？
D えー、私今日、無理。
C 付き合い悪い。
D しょうがないじゃん。

そう言つて、帰り始める人々。
その中で、Bだけが何か言いたげに女を見ている。

B 女 B
…ねえ。
なに？

女は、これ以上話したくない、というように、わずかに語調を強める。
Bはそれを察して、首を振る。

B B A B
…ううん、別に。
(遠くから) 行くよー。
あ、待って！

人々、去っていく。

オ二 …ふーん。
女 なに？
オ二 人間って、こんな感じなんだな、と思つて。
女 ……。
オ二 俺は、あつちから出たことがなかったから。
女 どうだった？
オ二 なにが？
女 人間。
オ二 疲れるね。
女 ……。
オ二 俺たちは、他のやつとはあまり関わらないから。
女 そうね。

間

女 オ二
すごく疲れる。
でも、それが人間の言う「愛し合う」ってやつなんだろう？
女は笑つて、

女 どうかなあ。そんなもの、ないと思うよ。
オニ ……
女 上辺では仲良くしてても、裏ではなにを考えてるかわからない。上っ面だけの付き
合い。
オニ ……
女 いつでも気分で裏切れる存在。

どこからか聞こえてくる、人々の囁き声――

人 ねえ、知ってる？
人 うそ
人 ホントに？
人 あいつが。
人 あいつが。
人 あいつが。

女 その程度のもものだから。
オニ ふーん…。

オニは、それには興味を示さず、

オニ で、だれを殺したいの？
女 ……
オニ 殺したいんでしょう？
女 まだはつきりしないんだよね。あの中のだれが犯人か。
オニ 犯人？

女は、記憶を辿るように、ゆっくりと話し出す。
記憶の中の幼馴染が、スクエアに出てくる。

女 私には、友達がいた。子供の頃から、ずっと一緒に育った幼馴染。
幼馴染 おはよう。…元気？
女 まるで家族みたいに…家族以上に、なんでも話せる相手。彼女のいない人生なんて、
考えられなかった。

幼馴染は、かつてそうであったように、女に寄り添い、立つ。
そしてポケットから取り出したものを、女に差し出す。

幼馴染 ねえ、これ…あげる。
女 あの日まで…。
幼馴染 お守り。

それは、刑事がオニに渡した遺留品である。

女 一年前のあの日、彼女は死んだ。殺されたの。何もしていないのに、ある日突然
「あいつはオニだ」と疑いをかけられて。

人々、スクエアに出てきて、幼馴染を取り囲んで行く。

女 その噂に追い詰められた彼女は、自ら命を絶った。

人々の輪の中に飲み込まれるように、幼馴染の姿は消えていく。

……。

オニ 女 一年間：私はどうしていいか分からなかった。どうにもならない怒りを抱えたまま、ただ日々を生きてきた。でもちょうど一年経ったその日に、私はあんたを見つけた。そして決めたんだ。

オニ 殺そうって？

女は、オニの言葉に苛立ちを感じて、オニを睨みつける。

女 まさか、怖気付いたわけじゃないでしょ？あんた、オニだもんね。どうせ人間の心なんか持っていないんだから、だれだって殺せるでしょ。違う？

オニは、しばらく女を見ている。

やがて、何気ない口調で、

オニ 別に、いいよ。

女 ……。

オニ やるよ。

間

女 そう。

オニ ……。

女 ならよかった。

オニ それから、俺たちの奇妙な生活が始まった。

3

牢獄

再び、刑事と向き合っているオニ。

…それから。

俺は人として暮らし始めた。人の生活は慣れなかったが、面白いこともあった。

面白いこと。

他人のことを考えると言うことが、ほんの少し分かった気がした。

別のところに、女。

そして、それを遠くから見ているBの姿がある。

女 オニに心はなかった。私たちが何をしようと、何も感じない。私がなぜ復讐を頼んだのか、それさえ彼には理解できていなかったでしょう。ただ不思議なことに：それはとても不思議なことだったのだけど、そのことが私を少し落ち着かせてくれました。

落ち着かせた。

オニ 刑事 あいつはそう言った。何も感じないでいてくれるのは心が楽だ、と。

人々
人々
人々
人々
人 A
人々
人々
人 A
人々
人 A
人々
人々
人 A
人々
人 A
人々

ねえ、聞いた？
聞いた。
あの子が、
オニの話を。
聞き回ってる。
あちこちで。
誰彼構わず。
聞き回ってる。
どうしてかな？
どうしてなの。
なんで、
なんで、
いったい何のために、
もしかして、
もしかして、
あの子もオニ？
オニの前に、半オニが現れる。

女

…私たちがどれほど探しても、話を聞いても、だれが噂を流した犯人かは分からなかった。だれもがだれかに聞いて、だれもがだれかにしゃべった。そこには噂だけがあつて、流した人間はいなかった。そうして、時間だけが過ぎていった。

4

スクエアの中央に女。
そこから少し離れたところに、オニ。
女を遠巻きに見ながら、囁き合う人々の姿がある。
その中で、会話を先導するA。

刑事
オニ

犯人は見つかりましたか。
……。
噂を流した。

間

刑事
オニ

人の真似事をしてみたかったのかもな。
……。
……。
なぜ、彼女の頼みを聞こうと思ったんです？
……。
……。

刑事
オニ

……。
大変なんだな、人間つてのも。
あいつは「なぜか」と聞かない。同情もしない。怒りもしない。疑いもしない。私の言うことを、ただそのままに受け止め、受け入れた。そのままに、ありのままに、受け入れてくれた。
……。
……。

半オニ おい。
オニ なんだ、お前……？
半オニ ちよつといいか？

一方で、女の元にBがやってくる。

B 女 B
……ねえ。
なに？
ちよつといい？

オニと半オニ――

半オニ お前、オニだろ。
オニ ……。
半オニ なんて人に関わる。
オニ 別に。
半オニ 覚悟がないならやめとけ。
オニ 覚悟？
半オニ ああ。
オニ なんの覚悟だ。
半オニ 人を死なせる覚悟だ。
オニ 死なせる？
半オニ そうだ。
オニ 俺は、人を殺してくれと頼まれた。だから来ている。今さら、言われるまでもない。
半オニ 殺すのは勝手だ。好きにしろ。でも死なせるのは違う。
オニ 違う？
半オニ さつさとオニの住処に帰れ。
オニ ……。
半オニ オニは人にはなれねえよ。
半オニ、去る。

オニ ……。

女とB――

女 B 女 B 女 B 女 B 女 B
仲良いんだね。
……。
あの彼と。
またその話？ 別に……。
そうじゃなくて、友達ができたんだな、って思っ
……。
あのことがあってから、みんなと距離を置いてるようだったから。
……。
良かったなって、思っ
……。

Bは何かを女に言おうとするが、口にできない。

B 女 B 女 B

…大丈夫？
何が？
何っていうか、その…。
別になんともないけど。
だったらいいけど…。

沈黙――

そのBの態度に、女は何か不穏なものを感じる。

B 女

ねえ、なに？何かあるなら言つてよ。
あの…。

そこに、CとDがやつて来る。

D 女 C

ねえ、見つけたよ。心当たりがあるって人。
…！！
案内してあげる。

女、オニを振り返る。

女

行こう。

5

河口のあばら家――

そこに待っていたのは、A。

女はあばら家に入り、オニは外に座り込む。

オニ

そこは、大きな川の河口近くにある、古びたあばら屋だった。あいつは中に入り、俺は外で待った。

来たわね。

教えて。だれがやったの。

その時、俺は奇妙なことに気づいた。小屋の周りに、たくさんの人々の気配があった。なんの話。

何って…教えてくれるんでしょう？だれが彼女を殺したのか。

なんでそんなこと知りたいの？相手はオニよ。違う。

オニだった。

違う。だれかが嘘をついて、殺したのよ。流した嘘よ。彼女は私の親友だった。オニのほづがない。

親友。

そうよ。

笑い声――

人 女 人

オニだね。

え…。

オニだ。

やっぱりオニだ。

人 人 人 人 女 人 人

親友だつて。
あいつと同じ。
ちよつと待つて。
どうする？
どうする？
どうしよつか？
どうしたらいい？

A、笑う。

A

決まつてるでしょう？

人々、女を取り囲んでいく。

オニ

…おい！

オニ、女の元に駆け寄ると、かばうように立つ。
警備隊、スクエアの外に立ち、人々に告知する。

隊長

昨日、街で一件の殺人事件が起きました。

下っ端

オニの関与が疑われています。

副長

町でオニらしきもの見かけた人は、直ちに警備隊に連絡してください。

女

殺人…？

女、ハツとして、オニを連れて逃げようとする。

しかし、人々に阻まれる。

女、Aを睨みつける。

女

…あなたがやったの？

A

何を？

女

あなたが噂を流したの？

A

さあ。

C

だれかが言った。

D

だれかに聞いた。

C

私じゃないし。

D

私でもない。

C

だれかが言った。

D

私じゃない。

人々、首を振る。

A

でもそれって大事なこと？

C

結果として、町は守られた。

D

だったらそれでいいじゃない。

C

私たちは間違つてない。

隊長

教えてください。

警備隊たち

オニはどこですか？

人々は、女とオニ、どちらともなく指差す。

人 人 人 人 D B D B D

なんでオニをかばうの？
…え？
なんで？
なんで？
なんで？
なんで？
なんで？
なんで？

人々、今度はBを取り囲んでいく。

B A B A B

ねえ、本当はみんな、分かっているんでしょ？ 私たちの中にオニなんかいない。いるはずがない。だって、ずっと一緒に生きてきたじゃない。この町で、みんな一緒に。それなのに、急にオニだなんて…そんなこと、あるわけじゃない。
…。
ここにオニなんかいない。ここにも、どこにも。
…。
ねえ、もうやめよう？ お願いだから…。

人々、冷めたような目でBを見ている。

なんでそんなこと言うの？

え？

なんでオニをかばうの？

…え？

なんで？

なんで？

なんで？

なんで？

なんで？

女 B

…ね？
…。

Bは再び人々に向かって、

B A B A 女 B

待って！
……！
なに？
違うよ、違う…。彼女はオニじゃない。
…。
二人とも、違う。

Bは女を振り返る。

オニ

…。

長い沈黙の後――

やがて女の手がゆつくりと上がり、オニを指差そうとする。

B、女をかばうように輪の中から出てくる。

A 女 A 女 A

ねえ、教えて？
え…？
オニは、どっち？
……！
あなたと、その彼…オニは、どっち？
女は、答えられない。

女 A 女 A 女 A 女

違う…私は違う…。
そう。
…。
…。
だといいいね。
…。
私はね、みんなに役目をあげてるだけ。ただ死んでいくだけの人生で、なんの役にも立たない私たちが、せめて一時、満足するための役目を。だって、生きる意味のない人生なんて、辛くない？
それが、オニを殺すこと？

A 女 A 女 A 女 A 女 A 女

…どうということ。
何が。
私のこと、オニにしたかったんでしょ？
別に。
…。
…。
だれでもいいの。
…。
…。
そうすれば、人でいられるもの。
…！！
あなただつて、そうでしょう？

A、女を見る。
女、先ほど指差そうとした手を、反射的に隠す。

B C B C B

私…は…？
辛いよね、悲しいよね、でも大丈夫、私はずっとそばにいるから。
やめて…。
だから、心配しないで。
やめてよ！

BはCの手を振り払う。
Cは瞬間、ショックを受けたような顔でBを見つめるが、やがて泣きながら人々の輪に戻っていく。

警備隊の笛――
駆け込んできた警備隊によつて、Bは取り押さえられる。
悲鳴とともに、Bは連れ去られる。

それを見送ると、人々は女たちに興味を失ったように、立ち去っていく。

C B C

私は…分かるよ。
え？
二人は、仲良かったもんね。その友達がオニだなんて、私だつて信じたくない。ねえ、みんなだつてそうでしょう？ だから…彼女はきつと悪くない。

BはCの元に寄ろうとして、ふと足を止める。

B

ちよつと待ってよ…ねえ…ねえ！

その中から一人、Bに寄り添うC。

A

私は殺さない。そんなひどいことできない。ただ…

A、女を指差す。

オニを探すだけ。

……。

その日、その時のオニを。

……。

だれも疑わない。だれも逆らわない。だって逆らったら、役目がなくなるもの。自分がだれか、わからなくなるもの。私はオニがだれかなんか知らない。オニが何かも知らない。でもこれだけは知ってる。私はオニじゃない。

……。

あなたもオニじゃない。

……。

ねえ、思い出して。あの時、あなたは何をした？

え……？

あなたの親友が死んだ時、あなたは何をした？

スクエアに、幼馴染が出てくる。

幼馴染は、女に助けを求めるように、手を伸ばす。

何も。

……。

何もしてない。

……。

だから、復讐したいんでしょう？ 本当は正しい自分を証明したくて。

……。

別に、いいよ。私をオニにしても。

女、答えない。

A、肩をすくめ、立ち去ろうとする。

オニ、その前に立ちはだかる。

…なに？

人は、互いを愛するものだと言った。互いを愛し、慈しみあい、助け合うものだと聞いた。

そうだよ？ちゃんとそうしてる。

……。

これはみんなのためだもの。(女に) …でしょ？

女、小さく首を振る。

違うよ…私は絶対に違う…。

女、Aに近づいていく。

同時にオニもAに迫っていく。

二人は、Aを捕まえると、もがくAを地面に押さえつける。

一時の間――

二人が離れた時、Aは死んでいる。

半オニ、出て来る。

半オニ
逃げ…。

オニ
……。

半オニ
逃げろ…！

二人、逃げていく。

6

オニ
俺たちは逃げた。

女
どこまでも、どこまでも。

オニ
全てのものから。

女
全ての人から。

オニ
そして町の外れ、人影の耐えた丘の上で、俺たちはようやく足を止めた。追っ手の

姿はなかった。夜風が汗ばんだ頬を撫で、丘にはただ葉擦れの音と俺たちの荒い息

遣いだけが響いていた。

振り返れば、町は温かな灯に満ちていた。先程までのことが嘘のように、温かく、

心地よい光に満ちていた。

やがて二人は、町外れの丘の上にたどり着く。

ようやく息を吐きながら、二人は座り込む。

しばしの間――

オニ
なあ…。

女は、オニの言葉を遮るように、

女
あんたがやった…。

オニ
え…？

女
あんたが殺した。ねえ、そうでしょう？ あれは、あんたがやったのよね。あんたが、

あいつを殺した。オニが、人を殺した。そうでしょう？

オニは、女を見つめている。

オニ
……。

女は、その視線から逃れるように、顔を背ける。

女
でもこれでよかったのよね。だって、あいつは人殺しだった。あんたも聞いたで

しょ。あいつが、私の友達を死に追いやったのよ。だから、これは正しいことだっ

た。そうよ、あいつこそオニだった。人殺しのオニだったんだから。ねえ、そうで

しょう？

オニ
……。

女
答えてよ…答えなさいよ！

問

オニ
ああ、そうだな。

間

オニ
その通りだ。

オニはいつもの通り、淡々と答える。
女は、まるで力尽きたように、

女
なんで…。

それ以上、言葉が続かない。
しばしの沈黙の後、オニは再び立ち上がる。

オニ
さあ、行くか。

どこへ。

さあ。

…。

でも、ここにいても、捕まるだけだ。

でも…。

なんだ。

女、オニを見る。

もう終わったでしょ。

…。

全部。

…。

だからもう、一緒にいる必要はない。

オニは、意外そうに女を見て、

そうか。

…。

そういえばそうだったな。

オニは、少しの間考える。

お前は どうする。

さあ…。

…。

分からない。もう…何も分からなくなっちゃった…。

風の音――

女はポツリと呟くように、

女
ねえ、オニは人を喰ったら、ヒトになれるんでしょ？
…。
…。
試してみる？

人 人 人

だれかが言った。
お前は何にでもなれるのだと。
無限の可能性があるのだと。

人々の行き交う中を、二人は身を隠しながら進んでいく。

7

女、頷く。

オニ
女

…行くか。
…ええ。

ひと時の静寂――

オニ
女

きれいだな。
本当に…。世界って、本当にきれい…。

二人は、しばらくその花吹雪を見つめている。

女
オニ
女

サクラの花…。
サクラ…？
だれもが待ち望む、春の花…。美しい薄紅色の花びらの舞うその下で、人々は集い、
笑う…幸せの花…。

女が辺りを見回すと、二人からほど近い斜面に、一本の桜の木があるのに気がつく。

女
オニ

これ…。
花びら…？

女はふと、それを手に取る。

女

あ…。

女

どうしたら、人はオニになれるのかな？

その時、再び風が吹き、二人はわずかに顔をしかめる。
その風に乗って、空から白いものが舞い降りてくる。

問

オニ
女
オニ
女
オニ

興味ないな。
そう。
人は疲れる。
そうだね。
ああ。

問

人 だれもが望む、素晴らしい夢。
人 それに向かつて努力をしよう。
人 きつと素晴らしい人生が待っているのだから。
人 でも私は知っている。
人 それは嘘だということ。
人 遠いどこか別の世界の…「だれか」の物語に過ぎないということ。

刑事 その二人の姿を、刑事はじつと見つめている。
彼らは旅を続けました。

人 家族は私を愛してくれる。
人 いじめる人がいるわけじゃない。
人 友達はたくさん。みんな仲良く過ごしてる。
人 でも…。

時折、人々は二人の姿に気づく。
その度に、二人は彼らを手にかけていく。

刑事 どこまでもどこまでも、安住の地を目指して…。

人 将来の夢を聞かれました。でも私は、答えられませんでした。そうしたら、優しく
人 声をかけられました。「若いんだから、夢の一つや二つ、持たなくちゃ」
人 私の友達は、みんな素敵な人ばかりです。いつもどこでも輝いていて、そんな彼ら
人 のことをみんなが憧れています。だから私は、いつでも笑っています。
人 世の中には、不幸な人たちがたくさんいます。でも私には暮らす家があり、食べる
人 ものにも着るものにも苦労したことがあります。これを幸福と呼ぶのだと、私は
人 でも…。

二人の足取りは次第に重く、苦しくなっていく。

刑事 春は夏になり、秋の終わりになっても、それは見つかりませんでした。

人 なのに、死にたい。
人 なのに、消えたい。
人 そんな私が嫌い。
人 そんなワガママを言っている自分が大嫌い
人 やがて二人は、別々に座り込む。

人々 この町には、空がない。真っ白い壁に囲まれた、閉じ込められた町の上には、いつ
もどんよりとした雲がかかっている。この町には、空がない。私はいつか、空を見
たいと思っていた。

8

町の果て、巨大な門扉がそびえ立つ所。
疲れ果て、座り込む女の前に、Bが現れる。

B 女

あ…。
…久しぶり。
女は逃げなければと思いながらも、体が動かない。

B 女 B 女

どうしてここに…？
探してたの。
え？
二人を。

B 女 B

Bは油断なく女と、その周囲を気にしながら、
噂になってるわよ。二人組のオニが、あちこちで人を殺してるって。
…。
信じられなかった。だってそうでしょう？私がかばったのは、結局オニだったんだって…そんなこと、思いたくなかったから。

女

そう言っつて、女を睨みつけるB。
女は、疲れたように目を伏せる。

…何の用？
Bは、決然と、

B 女 B

オニを渡して。
…！
最初っから気づいてた。あの男はオニだって。でも、警備隊に突き出すような真似はしたくなかったから…。

B 女 B 女

それに…あなたが変わっていくのを見てたから。
…。
彼が来てから、あなたは少しずつ、昔を取り戻していった。彼女が死んでから、ずっと心を閉ざしてたあなたが…。だから、このままあなたが幸せになつてくれるなら、それでもいいってそう思った。本当にそう望んだ。それなのに…。

B 女 B 女

今のあなたは、ただの人殺し。
…。
そんなの許せない。
Bは、覚悟を決めたように、女に近づいていく。

B

オニを渡して。イヤとは言わせない。オニを連れて行かないや、私がオニにされるんだから。

B 女 B 女

…。
…。
あなたは見逃してあげるって言ってるんだから、十分でしょ。何が不満なの？
…。
迷ってる時間はないわよ。警備隊には通報してあるんだから。このままじゃ、全員捕まっつて終わりになる。さあ、オニを渡して。

視線を交わす二人。

オニは、別の場所からその様子を見つめている。
半オニ、出てくる。

半オニ
どうした。

オニ
……。

半オニ
殺さないのか。

オニ
……。

半オニ
あの女の言ったことは本当だ。もうすぐ、ここに警備隊が来る。放っておけば、捕まるだけだ。

オニは、じつと女を見ている。

オニ
ああ、そうだな……。

女は、哀しくBを見ている。

オニ
なあ、俺がこいつを殺したら……。

半オニ
……。

オニ
あいつは喜んでくれるかな？

半オニ、まるでその問いを予想していたかのように、小さく息をつく。

半オニ
……それが関係あるのか？

オニ
さあ、分からない。

半オニ
……。

ただ、そんなことを考えただけだ。

オニは不思議そうに、自分の胸に手を当てる。

オニには心がない。人の言う、感情と呼ばれる何ものも持つてはいない。

半オニ
……。

オニ
でもな、あいつのため、この手を振るう度、俺の中で何かが叫ぶんだ。白い壁に囲まれて、閉じ込められた小さな牢獄の中から、その何かが出ようと、暴れ、もがき、苦しんでいるんだ。そしてその度、俺は……。

半オニ
……。
幸せを感じるんだ。

間

半オニ
……それが人間だ。

女、激しい痛みに耐えるかのように、ゆっくりと立ち上がると、微かな声で、

女 B 女
……ごめんなさい。

……！

本当に……。本当に、ごめんなさい……。

そして、よろよろと近寄ると、Bを抱きしめる。

オニ そうか…。
半オニ ……。
オニ そうなのか…。
半オニ ……。
オニ これが人間か…。

B、崩れ落ちる。
女の手には、いつの間にかナイフが握られている。

苦しいぞ。

……。

ヒトになるのは。

……。

オニ 所詮は、死に向かって歩くだけの人生…。何も感じず、何も考えず、人生に意味な
半オニ んかないと思っていた方が、はるかに楽だ。

オニ ああ。

半オニ が、だれかの生を願う事は、生きることの意味を認めることだ。そうならば、お前
はもうオニではいられない。

女、泣き崩れる。

半オニ 逃れたければ、道は一つしかない。

オニ、女の元へ行こうとして、ふと半オニを振り返る。

オニ あんたは…どつちを選んだ？

半オニ 選んでねえよ。

オニ ……。

半オニ 俺はハンパ者だ。

半オニ、去る。

刑事

冬の訪れを告げるように、空から雪が降り始めていました。その冷たい氷の綿毛は、立ち尽くす二人を優しく包み込むように、静かに、静かに、降り積もっていきました。この世のすべてを、白く覆い尽くすかのように。

オニ、女を見つめている。

刑事

二人の前には、扉がありました。この町と、外の世界を隔てる大きな扉。白い壁にただ一つ開けられた、外界への門。長く閉じられたまま、開けられることになかったその門が…。

9

オニ よう。

女 彼はそう、私に声をかけました。「大丈夫か？」

オニ 「うん」彼女は小さくうなずいた。こちらを見ない、そのままです。
女 寒いね。

オニ ああ、雪が降ってきた。

女 もう冬になるんだね。

オニ …早いな。
女 早いね。

オニ 上っ面だけの会話が、俺たちの間を通り過ぎて行った。

女 「春になったら…」彼はそう続けました。いつもの何気ない口調で。「またあの丘に行ってみよう。あの日、あのサクラの花を見た、あの場所へ」その時、彼が微かに笑ったように見えたのは、気のせいだったでしょうか。

オニ 「そうだね」彼女は答えた。でも本当は分かっていた。俺たちのどちらも、その言葉を信じていないことを。

女 きれいだろうなあ。
オニ ……。

女 きつと、今まで見てきたどの花よりも、ずっと…。

女 は花びらを探そうとするように、手を伸ばす。
その上に、雪が次々舞い降りていく。

女 ……。本当は気づいていた。彼女がずっと、助けを求めてたこと。ずっと、ずっと…私を見てたこと…。でも私は、彼女の伸ばす手を、すぎる目を、かけようとするとその言葉を…何度も何度もためらいながらも、吐き出したいその想いと、私を氣遣う優しさとの間で引き裂かれながら、滝のように溢れる血とともに絞り出したその声を…私はこの手で握りつぶした。

オニ ……。
女 は私だ。彼女を喰ったのは、私。自分の親友を、私は、殺しました。

女 は、解き放たれたように、オニに向かって小さく笑う。

女 わかっていた…。本当はずっと、わかっていたんだ…。

オニ は、困ったように首を傾げ、

オニ こんな時…どんな顔をすればいい。人間っていうのは、こういう時、どんな顔をすればものなんだ。

女 (笑う) さあ、私も分からないよ。

女、空を見上げる。

女 このまま、雪に埋もれて消えてしまえたら…全部なかったことにできるのかな…。

オニ は、半オニの言葉を思い出す。

半オニ 逃れたければ、道は一つしかない。

女 なんて思っちゃったかなあ…。なんで願っちゃったんだろうなあ…。自分には、そんな資格ないってわかっているのに。そんな価値なんかこれっぽっちもないって、分かっていたはずなのに…。どうしてかなあ…。「生きて欲しい」って。
オニ ……。

女 でも、二人は無理だから…。

オニ (半オニに) …頼みがある。

女 ねえ、初めて出会った日…頼んだよね。人を一人殺して欲しいって…。

オニ その願い…今、聞いてもらえる？

女、ナイフを差し出す。

オニ、それを受け取る。

刑事 それで彼女を殺したのですか？

オニ そうだ。

刑事 彼女の願い通りに。

オニ そうだ。

刑事 その場所です。その長く閉ざされた、扉の前で。

オニ そうだ。お前たちは見たはずだ。大量の血の跡と、凶器のナイフを。引き裂かれた服の残骸を。

刑事 ……。

オニ 長い長い旅路の中で、あいつは疲れ切っていた。誰にも受け入れられず、どこにも居場所がない。何の意味もない日々を、ただ生きるためだけに生きる…。死ぬことが、ただ一つの救いだった。

刑事 遺体は。

オニ ……。

刑事 発見されていませんよ。

オニは、初めて刑事を振り返る。

オニ 喰った。

刑事 ……。

オニ 俺は鬼だからな。残りは森に投げ捨てた。春になれば見つかるだろうさ。

刑事は小さく首を振る。

刑事 現場に残された血痕の調査結果です。現場にあつた血痕はオニのものでした。人間

ではない。もちろん、これが二人組のオニの仲間割れであるなら、問題はなかったでしょう。が、そうじゃない。彼女は人間だった。少なくとも、私はそう確信しています。だとすると、あの場で彼女は死んでいない。

……！

証人は一人しかいないですよ。あなたが殺したのを見たと言っているのは。

刑事は半オニを指差す。

刑事 あなたは現場に自らの血をまき、彼に頼んで彼女の死を偽装した。

オニ、刑事を睨みつける。

オニ 何で俺がそんなことをする。

刑事 生きていて欲しかったからでしょう？

オニ ……。

刑事

彼女に。

オニ

……。

刑事

あなたに本当に心がないなら、初めからついていきませんよ。あの土砂降りの雨の日……あなたが出会ったその日に、おそらく彼女は死んでいたでしょう。自らの人生に絶望して。が、あなたはそんな彼女を救った。なぜです。

ひと時の沈黙――

オニ

……同じだったからだ。

刑事

同じ。

オニ

あいつの心は、俺と同じ、カラッポだった。まるで空き箱に捨てられた獣のように、虚ろで、今にも消えそうな、小さな命を抱えて、あいつは雨に濡れていた。だから俺は、ついに行つたんだ。

刑事

……。

オニ

……。ただどな、日一日、過ぎるごとに、俺は怖くなった。共に過ごす違和感を、感じなくなるのが怖かった。孤独が癒されることが怖かった。そうなれば、もう俺は独りに戻れなくなる。

刑事

……。

あいつに生きていて欲しかった？ 確かにそうだ。だがあいつのためじゃない。自分のためだ。たとえ側にいなくても、俺のことを知ってる人間が、この世のどこかにいる。それだけでいい。それで十分だ。

遠くから、裁判官たちの声が響いてくる。

人

皆さん、評決は決まりましたか？ それでは、答えてください。

人

有罪。

人

有罪。

人

有罪。

人

有罪。

人

有罪。

では被告人を、八件の殺人事件に対し、有罪とします。刑の日取りは追って連絡します。以上。

刑務官が現れ、オニを連行していく。

刑事

最後に聞いてもいいですか。……あなたは、オニですか？

オニは足を止め、首を振る。

オニ

いや。ヒトだ。俺はあいつを喰って、ヒトになったんだ。

オニは連れられていく。

刑事は、意を決したように、刑務官に声を掛ける。

刑事

一つ、提案があります。

10

女

人生に意味などないと思っていました。世の中なんて、変わらないと思っていまし

女

た。でも私は、ただ一つ、願ってしまったのです。それは本当にちっぽけな願い事で、叶うあても、叶える意思も、その時の私にはありませんでした。でも、だれかの生を願った、その時に、その願いは鋭い刃となってこの身を切り裂き、私は自身を心をもき出しにしてみました。そうして生まれ出た、その小さな心は、小さな命は、こう囁いていました。「前へ」

「未来へ」

刑事

その日、長く閉ざされていた、町の門が開かれました。そして、一人のオニが町から追放されました。そこに広がるのは果てしない荒野で、人々は嘲るように言いました。「生きていけるはずがない」「数日持てばいい方だ」そうして門が閉じられた時にはもう、だれも彼らのことを覚えていませんでした。：確かにそうなのかも知れません。ですが、私は思うのです。たとえ彼らがどのような道を選ぶとしても、残された日々がわずかであったとしても、彼らは今、自由だ。彼らを縛るものは何もない。それが幸福の道かは分かりませんが、少なくとも彼らは、自らの人生を歩むことができるでしょう。

刑事

私はそれを、羨ましく思うのです。

幕